

手間をはぶく飼料作り

牧草地の造成

自給飼料の生産はとかく従来から作り馴れている、実取り作物の青刈り栽培に走り易い傾向がありますが、青刈り作物の栽培は多毛作を通じて、多収穫を挙げることは比較的容易にできますが、反面多肥と多労が要求され、収量の急増する頃には質が低下する欠点もあります。

特に最近のように農業労力の不足が甚だしくなり、他面経営規模の拡大が要請されて来ますと、飼料生産の省力化が重要な問題となりましょう。

このことから「収量の多い安定した牧草地がほしい」の声があったところで言われるわけですが、この希望を満たすための牧草地造成法の一、二を紹介しましょう。

一 倒伏し易い保護作物のえん麦をやめてイタリアンライグラスを利用する牧草地造成

従来寒冷地の牧草地造成といえますと、殆どが、燕麦か、亜麻を混播し、稚草を保護し、初年目の農業収益を保護作物の燕麦子実、または亜麻に期待してまいりました。しかしこれは高所得の要求される今日では中途半端で、その上折角の保護作物も倒伏、または多収を狙った密播でもしますと却つて発芽した牧草（特にまめ科）が消滅し草地造成に失敗することがしばしばあります。

少しばかりの亜麻や燕麦子実を収穫しなくとも初年目から牧草をとりたい場合、または生産量の高い草地を造成しようとする場合は保護作物のえん麦や、亜麻の代りに、いね科一年牧草イタリアンライグラスを一〇呷当たり〇・五

〜一〇ポキ混播しますと、生育の早いイタリアンは良く雑草を抑え、倒伏の心配もなく他の牧草を保護し、その上早春まで三カ月もしますと（丁度燕麦の青刈り時期）一番草の刈り取りができ、更に秋にはイタリアンライグラスの二番草と赤クロバ、チモシー、オーチャードグラス等他の牧草も十分刈り取りできるようになり、従来の利用初年目以上の収穫ができます。

二 古い牧草地の夏期更新で翌年は又牧草地に（牧草とデントコーンの二毛作栽培）

牧草地は古くなりますと、収量、品質とも低下することはよく知られており、今までは秋または早春に更新のため耕起されていましたが、次の方法で夏の更新も有利です。

◎ 牧草の一番草を収かくして直ちに更新

寒冷地の牧草の一番草は年間収量の七〇％位を占めるものです。そこでこの一番草を少し早目に収穫して貯蔵、跡地を直ちに耕起。

◎ 耕起した跡地には早生で栄養生産（子実量の多い）の高い一代雑種デント（ハイブリッドコーン）を栽培（六頁下段参照）しますと、普通の土地で四〜五トの収量（その中約半量は穀穂量）が得られます。

◎ そして翌春は新播の草地を造りますと、また二〜三年は手間がかからずに良質草を多収出来る牧草地を持つことが出来ます。

飼料作りの手引

赤クロバの東西両横綱
優良品種 ハミドリと、ケンランド

東北や北海道に多い赤クロバの銹病と、炭疽病、更に菌核病（冬枯れ）に強い品種として弊社で育成したハミドリは太平洋を隔てた米国加州で増産され、厳重な種子検査をパス、続々と入荷しております。

「輸入種子は雑草の混入も少なく発芽もよいが、特性や収量の面でも」というムシユンはこれで完全解決、寒冷地の赤クロバはまずハミドリで。

一方暖地での炭疽病は夏枯れの被害を一層大にしていますが、これには耐病性優良品種のケンランドで。

チモシーの優良系統が久々に発売されました
新品種 クライマックス

牧草の先進国の方々の日本の草に対する所見中で、よく耳にすることに「日本のチモシーは葉が少ない」があります。新品種クライマックスは最も葉の多い、耐寒性に富んだ（カナダで重用されていることでも証明される）、多収な優良種です。

ルーサンの優良品種は

全国的にはデュピ、暖地ではナラガンセット、ウイリアムスブルグ

いずれも初期生育が早く、初年目から多収で、刈り取りも早く出来、倒伏少なく、日本の気候や、利用状態にピッタリの品種です。

寒冷地では高栄養飼料増産のために、暖地では暑熱や、日照りに強い所謂夏枯れ対策牧草として、一番肥沃な土地に取り敢えず一呷くらいでも作ってみましょう。

今春は改良オーチャードの準備が出来ました

晩生、多収、その上雲形病に強いことから、各地で好評。例年秋で全部品切れ、春まき地帯には大変迷惑をかけた。本年は豊富に準備いたしました。早目に御注文下さい。